



国際会議と逞しくグローバル環境で活躍して欲しい博士

小原 實[†]

International Conference and Globally Robust PhDs

Minoru OBARA[†]

日本の大学院の理工学研究科の大学院学生の国際会議での成果発表は恒常化しており、嬉しい限りである。発表後凱旋帰国し、次の成果をもう一度発表したいと研究に励む学生が多い。

さて、この国際会議には概ね2つのタイプがある。1つは“サイエンスのための会議”(for science)で、小規模で(参加者が概ね200人程度)、参加者はグローバルに選ばれた科学者のみで、科学的議論が主体である。1つの科学トピックが脚光を浴びると世界的に著名な研究者・学者が開催を呼びかけて会議は開始。当該会議の創始者が不幸にも逝去またはそのトピックが“hot”でなくなると存続が危うくなり、他の小規模会議と同一場所で複数の会議が併催。その後、参加者が少ない会議は自然消滅または他に取り込まれる。例えばSPIEが主催する光科学技術関係の国際会議総数の約6%が併催である。

もう1つの国際会議は非常に大規模で(概ね5,000人以上)、研究者にとって成果発表は名誉であり、会議参加者は科学的技術的議論よりも自分の新規な成果を多くの参加者に周知・宣伝するために(for publicity)会議に参加する。このタイプの国際会議には大規模な展示会が併設される。科学技術国際オリンピックである。科学技術の発展には、2つのタイプの国際会議が必要であるし、2つのタイプの国際会議のビジネスモデルが確立している。

大学院学生の参加・発表は、2つのタイプの国際会議で優遇される。登録料も低額に設定され、論文発表賞・旅費助成のチャンスもある。素晴らしい成果を発表した大学院学生(ポスドクを含む)にはヘッドハンターが接触してくる。学生諸君には、国際会議での議論を踏まえて、新規成果の解釈・説明の完成度を高めてImpact Factorの高い論文誌への投稿にチャレンジして、新規成果の価値を確定していただきたい。

政府の先の「イノベーション25戦略会議」では、イノベーションを「単なる技術革新にとどまらず、新しいビジネスや新しい社会的枠組みも含んだもの」と定義し、特に「生活者の視点からの新しい豊かさの実現」「大きなアジア、そして世界との共生による成長」「志の高い、創造性の高いチャレンジする人が輩出され活躍する社会」の3点を念頭において議論すべきとの方針が打ち出された。元々「イノベーション」を提唱したのは、オーストリア生まれのシェンペーター(1883-1950)で、後にハーバード大学の教授になった理論経済学者である(伊藤 光晴, 根井 雅弘:「シェンペーター」, 岩波新書, 1993)。最近では、イノベーションは概ね「新規技術、並びに複数の技術やプロセスの新たな融合により社会的、経済的に変革をもたらす価値の創造」と定義される。そのアウトカムはグローバルに人類の平和と真の社会的発展である。前記3つのイノベーションの中で、大学院のミッションは、「逞しく、創造性の高い挑戦をする博士の輩出」である。先ず「博士が活躍できる社会の構築」が先か。どうも島国の長い歴史的背景のためか、学生にとっても島国で仲良く生活することが第一選択肢となっている。輝かしい博士のキャリア形成を我々は支援する必要がある。21世紀のグローバル企業の発展は、技術者の数ではなく、一人の有能な技術者がいるかどうかで決まる。技術が飽和傾向にある21世紀は、研究は深堀だけでなく異分野の技術を水平融合し、技術・システムをデザイン統合する技術者を希求している。一人の有能な技術者が活躍できる21世紀型企業風土への革新も不可欠である。

国際会議で新規成果を発表する大学院生の志をさらに涵養し、さらに高いレベルの研究に発展させ、国際会議でのリーダーとなって欲しいものである。さらに少し専門分野の異なる国際会議で“他流試合”を演じると、人間的グローバルネットワークも拡大でき、そこで得た評判は本来の土俵での評価を上げることにもなるであろう。

政府は平成18年4月から「第三期科学技術基本計画」を推進中である。研究成果の追求と並行して、特に強調したいのは逞しく、志が高く、グローバル環境で活躍できる博士の育成である。優秀な博士の育成は、中長期的にみて研究の成功を担保する最も確実な方法でもある。

[†]慶應義塾大学 理工学部電子工学科 (〒223-8522 神奈川県横浜市港北区日吉3-14-1)

[†]Keio University, Faculty of Science and Technology, 3-14-1 Hiyoshi, Kohoku-ku, Yokohama, Kanagawa 223-8522